

懸賞論文優秀賞

新聞における朝鮮蔑視観の展開

——伊藤博文殺害から韓国併合までの世論の動向を中心に——

千葉大学（日朝関係史）

野村 美和

要 旨

本稿は伊藤博文「暗殺」事件から韓国併合までの朝鮮蔑視観の変遷を、新聞史料を中心として考察するものである。一般的に朝鮮蔑視観は、日清戦争・日露戦争を経て、以後も脈々と受け継がれていくと推測されている。果たして朝鮮蔑視観に収斂されない多様な朝鮮観は存在しなかったのか。本稿ではこの推測にたいして、東北、九州などの地域の異質性をもとに再考しようとするものである。それは日本の国民国家成立と朝鮮蔑視観の関係を再考する過程である。中央に周縁として差別された東北と、薩長に代表される九州とでは国民国家成立以前の社会構造が異なるため、国民として均質化される際に働く他者差別にはおのずから異なる側面があろう。

史料は日本語新聞を扱い、中央紙として『万朝報』、『時事新報』、『東京朝日新聞』を検討している。また東北の国民化という観点から『岩手日報』と秋田で発行された『東北公論』、朝鮮半島に地理的に近いということで『佐賀新聞』と熊本で発行された『九州日日新聞』を取り上げる。そして在朝日本人の思考を追うべく『朝鮮新報』を対象とする。

結論として、日露戦争以後の日本社会に、実際には多様な朝鮮観が存在していながらも常に朝鮮蔑視観という一定の方向に収束するように再生産されていった事実がうかがえる。しかしながら、画一化された朝鮮蔑視観に変化の兆しを与え、日本の朝鮮政策に転回を迫ったのが伊藤「暗殺」事件であった。事件を契機として、朝鮮人の愛国心は日本国内で広範に認められ、朝鮮人のナショナリズムを弾圧する支配体制が必要とされたのである。また、中央から周縁的な領域として排除されていた東北が、朝鮮を周縁と設定し自らの国民意識を確立しようとしたことは事実である。そして安重根に愛国心を認め、韓国併合に疑問を呈す人々は中央にのみ限定されず周縁の東北にも現れていたことが史料から考えられる。

はじめに

I 中央紙に見る朝鮮観

II 地方紙に見る朝鮮観

むすびに

※ 論者は千葉大学大学院人文社会科学研究所修士課程を修了した。